第二回　平成二十一年五月十六日

考古学からみた日本の中世から近世への社会変貌
―研究の現状と展望を中心として―

川口　宏海

はじめに

近世考古学の研究は、二〇数年を経て一定の成果をあげつつあります。特に、関西においては、中世から続く堺・京都・奈良町や豊臣秀吉が建設した大坂城下町などの都市遺跡の調査・研究が進んでいます。一方、城郭や銭貨・墓・鋳造遺跡などの研究からも、近世移行期についての研究が進んできました。また、輸入陶磁器や国産陶磁器、在地土器などの出土遺物からも編年や画期論が盛んとなってきています。

文献史学では、織田信長政権をもって近世ととらえる説や豊臣秀吉政権の成立をもって近世とする説など、さまざまな議論が交わされてきましたが、考古学からみたらどうなるのでしょうか。本報告は、これまでの研究成果を踏まえつつ、都市遺跡研究の立場から研究の現状を整理し、近世社会の成立についての私の見解を示すと共に、今後の課題を展望します。

1．遺構論から見た画期（表1）

（1）都市遺跡による画期論

遺構の中で、特に政治的な動きを直接反映していると考えられるのが、城郭、城下町を含む都市遺跡です。中世後期～近世初頭の都市としては、まず古代より連綿と首都として機能した京都をあげることが出来ます。京都は応仁の乱（一四六七～七七）以後荒廃しますが、戦国期の都市に姿を変えて継続します。永禄一二年（一五六九）には織田信長が足利義昭を戴いて入京するとともに足利将軍邸を建設し、天正一九年（一五九一）には、信長の後を継いだ豊臣秀吉が京都に天正地割を施し、御土居や寺町を建設して大改造を行います（第3図）。これらの遺構が市内各地で発掘され、都市京都に大きな画期をもたらしたことが堀内明博氏によって明らかにされています（参考文献14）。

また、中世後期からは、大阪府堺市の堺環濠都市遺跡や兵庫県神戸市の兵庫津遺跡などが港湾都市として発達します。

特に堺環濠都市遺跡（第9図）は、応仁の乱（一四六七～七七）にまつわる政治的対立の影響で、文明元年（一四六九）以来、守護大名細川氏方の遣明船の発着港となってから急速に発達し、一六世紀前半の大永七年（一五二七）から享禄五年（＝天文元年・一五三二）にかけて「堺公方」と呼ばれた細川

晴元の拠点となり、一六世紀中頃には四国の有力戦国大名として成長した三好氏の港湾拠点ともなり、政治的にも重要な存在となってきます。そして、天正一四年（一五八六）に豊臣秀吉によって都市の象徴であった環濠が埋められ、東部地域が開発されたりする大きな変革が起こります。また、豊臣氏が滅んだ慶長二〇年（一六一五）の大坂夏の陣によって焼亡した後、徳川氏の再興によって都市は一

表１　遺構論から見た画期論　　△初源期　○小画期　◎大画期

項目		個別遺構論			個別都市論		
		便所		竈	堺		京都
氏名		川口宏海	前川要	山上雅弘	森村健一	續伸一郎	堀内明博
15C	1				14C 中頃～		
	2				△Ⅰ期中世都市 萌芽期		
	3	△出現	△出現			△裏地開発	
	4				○Ⅱ期中世都市 発展期		
16C	1	共同利用	共同利用				
	2	○個別利用成立	○個別利用成立	△出現	Ⅲ期	○裏地占有化	
	3				○Ⅳ期中世都市 隆盛期		○信長将軍邸 永禄 12 年（1569）
	4			○普及		◎東部開発 天正 14 年（1586）	◎秀吉天正地割 天正 19 年（1591）
17C	1		◎個別利用確立		◎Ⅴ期近世都市 萌芽期		
	2						
	3				○Ⅵ期近世都市 発展期		
	4						

項目		個別都市論	近世城下町発展段階論
		大坂	全国
氏名		鈴木秀典他	前川要
15C	1		
	2		
	3		
	4	△石山本願寺期	
16C	1		
	2		△戦国城下町
	3		
	4	◎豊臣前期　天正８年（1580） ○豊臣後期　慶長３年（1598）	◎近世城下町初現期 天正４年（1576）
17C	1	○徳川初期 慶長 20 年（1615）	○近世城下町完成期 慶長６年（1601）
	2		
	3		
	4		

変します。この堺環濠都市遺跡の変化については、森村健一氏（参考文献19）や續伸一郎氏（参考文献10）らによる画期論が提唱されています。

大坂は、明応五年（一四九六）に一向宗（今日の浄土真宗）の蓮如（れんにょ）がこの地に坊舎を建立したことを端緒とします。天文元年（一五三二）に一向宗の本拠地であった京都の山科本願寺が法華宗徒らによって焼き討ちされて以後は、これに替わって、大坂の蓮如の坊舎跡に造られた石山本願寺が畿内の中心的寺内町に成長します。元亀元年（一五七〇）から天正八年（一五八〇）まで、織田信長と対立して石山合戦が行われ、顕如が退去して終わりを告げた後、跡地に豊臣秀吉が大坂城と城下町を築き、豊臣政権の本拠地となります。秀吉晩年の慶長三年（一五九八）には、嫡男秀頼のことを考えてか、三の丸を構築し町屋を船場に移すなど、城下町を大改造します（第13図）。慶長一九年～二〇年（一六一四～一五）には、豊臣勢力をつぶすべく徳川家康が大坂城を攻めて大坂冬の陣・夏の陣が起こり、以後徳川氏の江戸期大坂城、城下町建設が行われます。これらの出来事とともに大坂城下町も大きく変化し、画期となったことが故鈴木秀典氏（参考文献9）や森　毅氏（参考文献4）、松尾信裕氏（参考文献16）らによって明らかにされています。

このほか畿内の有力武士の拠点である畠山氏の高屋城（大阪府羽曳野市）、畠山氏、のち三好義継・若江三人衆らが拠った若江城（大阪府東大阪市）、池田氏の池田城（大阪府池田市）、伊丹氏の伊丹城（兵庫

県伊丹市）などで一五世紀後半～一六世紀初頭以降に遺構が次第に濃密に検出されるようになり、一六世紀中頃以降いわゆる戦国城下町として成長してきたことが明らかとなってきました。さらに織豊政権によって城主が追われ、城郭が破却されると、城下町の性格が大きく変化していくことが知られます。伊丹・有岡城下町については、藤本史子氏（参考文献13）、小長谷正治氏（参考文献1）、川口（参考文献2）らの研究が知られています。これらの城下町は、中世後期に経済的拠点であった宿場町や市の座を奪い、新たな地域的拠点となったであろうと考えられます。

加えて、近世城下町の規範となった織田信長・豊臣秀吉ら織豊系大名が各地に築いた織豊系城郭と城下町の発展過程が前川　要氏によって明らかにされ、天正四年（一五七六）前後の織田信長の安土城下町建設を近世城下町の初現期としてとらえ、慶長六年（一六〇一）前後の姫路城下町建設をめどに近世城下町の完成期となる、とされています（参考文献15、第1図、第2図）。

（2）個別遺構による画期論

都市遺跡の発掘、研究が進む中で、都市を横断して個別の遺構をもとにして発展過程を考察する研究も進んでいます。これらは、次節の遺物による画期論とともに都市生活レベルでの生活様式の変化を反映したものといえましょう。

便所遺構は、糞尿を肥料として利用するために都市から農村へと買い取られていく近世的リサイクルシステムを象徴する遺構のひとつです。私の一五世紀第3四半期に出現し、一六世紀第2四半期以降各戸に個別に設けられることをもって画期とする考え方（参考文献2ｂ）や、これに加えて一七世紀第1四半期に確立する、とした前川　要氏（参考文献15ｂ）の説があります。

竈（かまど）遺構は古くから寺院などで見られますが、近世には都市住宅に個別に造りつけ竈として定着していきます。都市生活の上から近世の成立をうかがえる遺構です。これには、城郭の資料を中心としてまとめた山上雅弘氏の研究（参考文献20）があり、一六世紀第4四半期に普及するとします。

2．遺物論から見た画期（表2）

（1）陶磁器による画期

陶磁器による画期論としては、国産陶磁器のうち新規に成立した描画陶器である佐賀県の唐津焼、岐阜県の志野焼の成立を画期とする鈴木重治氏の説（参考文献8）があります。鈴木氏はこの時期を天正一〇年代（一五八二～九二）においています。

一方、消費地遺跡の出土陶磁器全体の組成変化から論じたものに、奈良町の資料をもとにした森下恵介・立石堅志氏の論（参考文献17）や大坂城下町の資料をもとにした森　毅氏（参考文献4、参考文献18）

の論などがあります。前者は奈良町に「伊万里系陶磁器」すなわち肥前陶磁器が普及する一七世紀第2四半期の奈良Ⅴ期を近世への画期とします。後者は、豊臣後期すなわち慶長三年（一五九八）以後と徳川初期の一六二〇年代以降に大きな画期を見出しています。

（2）在地土器による画期

一方、各遺跡の近在で生産されたと考えられる素焼きの在地土器からは、中世に一般的であった瓦などと同様にいぶし焼きを施した瓦質土器からいぶしをかけない土師質土器への変化を一五世紀後半に認め、一七世紀第1四半期頃の土師質土器皿の減少、土釜の衰退、土鍋の焙烙化などを画期ととらえる土山

表２遺物論から見た画期論　　○小画期　◎大画期

項目		陶磁器		在地土器
氏名		鈴木重治	森下恵介・立石堅志	土山健史／森村健一
15C	1			
	2			
	3			
	4		○奈良Ⅳ-A 期	○土師質化
16C	1			
	2			
	3		奈良Ⅳ-B 期	
	4	◎唐津・志野出現 天正 10 年代 （1582 ～ 92）	奈良Ⅳ-C 期	
17C	1			◎土師質皿減少 土釜衰退・土鍋焙烙化
	2		◎奈良Ⅴ期 肥前磁器出現	
	3			
	4			

健史氏（参考文献12）や森村健一氏の説（参考文献19）があります。

（3）その他の遺物による画期

その他には、近世を象徴する遺物である煙管（きせる）があります。いわゆる「南蛮貿易」によって日本にもたらされたもので、一六世紀第4四半期頃に伝来したと考えられています。古泉　弘氏（参考文献3）や豊田裕章氏（参考文献11）などの考察があり、私も伊丹郷町遺跡についての論考を提示したことがあります（参考文献2d）。

鉄砲も同様ですが、文献からは天文一一年（一五四二）（イエズス会『日本教会史』）や天文一二年（一五四三）（『鉄炮記』）などの説がありますが、これはまだ考古学的には不明確です。一六世紀後半には鉄砲玉などが遺物として見られます。これについては、今後の課題だと思います。

3．都市遺跡の主な遺物の変遷と画期

次に私なりに畿内の都市遺跡から出土した遺物をまとめてみたいと思います（表3）。取り上げた遺跡は、中世後期から連続して分析できる京都、堺環濠都市遺跡、奈良町です。

用途別に見ると、供膳具の碗皿類では、中世に上層階級で用いられた中国製青磁は一六世紀第3四半期

を境に衰退し、元代から生産が始まった青花は一五世紀以降上層階級に普及し、一六世紀後半には都市上層民にも普及します。しかし、明末清初の動乱のために一七世紀第２四半期を境に減少します。これに替わって豊臣秀吉の朝鮮侵略によって拘束された朝鮮人陶工らによ

表３ 都市遺跡の主な遺物の変遷

項目		供膳具					調理具							煮炊具		
器種		碗・皿					擂鉢							釜		
種類		青磁	青花	唐津	志野	肥前	○備前 ◇丹波 △信楽 □土器							土器		
地域		西日本					堺			京都			奈良		堺	京都	奈良
15C	1	○	◇				○		■瓦	○			■瓦		●瓦	●瓦	○
	2	○	◇				○		■質	○			■質		●質	●質	○
	3	○	◇				○		■	○			■		●	●	○
	4	○	◇				○		□土	○			△	■	◎土	●	○
16C	1	○	◇				○		□師	○	◇	△	○ △	■	◎師	●	○
	2	○	◇				○		□質		◇	△	△	■	◎質		○
	3	○	◇				○		□	○	◇	△	○ △	■	◎	○大	○
	4		◇	◎	□		○		□		◇	△	△	■	◎	○和	○
17C	1		◇	◎	□	△	○		□	○	◇	△	○ △	■	◎	○ 12	○
	2		◇	◎	□	△		◇			◇	△	△	■		型	○
	3			◎	□	△		◇			◇	△	△				
	4			◎	□	△		◇			◇	△	△				

項目		煮炊具			その他		
器種		鍋・焙烙			焼塩壺		風炉
種類		土器			土器		土器
地域		堺	京都	奈良	堺	京都	堺
15C	1	◆瓦	◆瓦				◆瓦
	2	◆質	◆質				◆質
	3	◆	◆				◆
	4	◆ ○	◆				◆
16C	1	○	◆				◆
	2	○					◆
	3	○	□大	□大	□		◆
	4	○	□和	□和	□	□	土△
17C	1	○	□型	□型	□	□	師△
	2	焙●	□	□	□	□	質△
	3	焙●	■焙	■焙	□	□	△
	4	●	■焙	■焙	□	□	△

って国産の肥前磁器が一七世紀第1四半期から生産され、一七世紀後半には農村にも普及していきます。これよりやや早く、近世的描画陶器の唐津焼、志野焼などが一六世紀第4四半期に成立します。

調理具では、中世後期に西日本を中心に普及してきた岡山県の備前焼の擂鉢が一七世紀第1四半期以降減少し、替わって兵庫県の丹波焼擂鉢が普及します。堺環濠都市遺跡では、中世から陶器を補完してきた瓦質土器擂鉢（すりばち）は、一五世紀後半に土師質化し、一七世紀第1四半期を境に減少します。京都では、丹波焼擂鉢が滋賀県信楽焼擂鉢とともに一六世紀初頭から普及し始め、一七世紀第2四半期以降備前焼の衰退を受けて中心となります。奈良町では、在地の瓦質土器擂鉢が一七世紀第2四半期まで続きますが、以後は一五世紀末から普及する信楽焼擂鉢が主流となります。

煮炊具では、土釜は堺環濠都市遺跡では一五世紀後半に瓦質土器から土師質土器に変化し、一七世紀第1四半期まで存在していますが衰退します。京都では瓦質土器が一六世紀第1四半期まで続き、以後は大和型土釜が流通して一七世紀第1四半期まで残るが衰退します。奈良町では大和型土釜が一七世紀第2四半期まで残るが、衰退します。以後はおそらく土釜を用いることが衰退し、鉄釜が中心となって用いられていくのであろうと考えられます。

また、土鍋は、堺環濠都市遺跡では瓦質土器が一五世紀末まであり、この頃に兵庫県の東播地域の土鍋の系譜を引く土師質土器鍋が出土するようになります。これは一七世紀第2四半期以降、底の浅い焙烙と

なって続きます。京都では、瓦質土器が一六世紀第1四半期まであり、一六世紀後半から大和型土鍋が流入します。そして、一七世紀第3四半期から底の浅い焙烙となります。奈良では、大和型土鍋が京都と同時期に出現し、同様に一七世紀第3四半期から焙烙となります。これらも土釜同様、一七世紀前半以後は用途を失い、副次的機能、すなわち炒る機能を主要な用途にするように器形が変化したのであろうと考えられます。本来の鍋の実用的機能は、やはり鉄製品が担っていったものと思われます。

その他の遺物としては、近世に続く焼塩壺があります。これは堺環濠都市遺跡で一六世紀第3四半期に出現し、京都では、一六世紀の第4四半期に流通します。以後は江戸へも流通し、高級食卓塩として名声を得ていきます。風炉は移動型の熱源です。中世には瓦質土器でしたが、堺環濠都市遺跡では一六世紀第4四半期に土師質土器の新たな形式の風炉が生まれ、江戸期に続いていきます。

まとめ

遺構論からは、天正四年（一五七六）前後の織田信長の安土城下町建設を近世城下町の初現期としてとらえる説が年代的にもっとも古く位置づけられます。続いて、天正一一年（一五八三）の豊臣秀吉の大坂城下町建設、天正一四年（一五八六）の堺の環濠を埋め都市改造することや、天正一九年（一五九一）の京都の天正地割りなど豊臣秀吉の事業が続きます。前川氏の近世城下町発展段階論（第1図、第2図）で

は、慶長六年（一六〇一）前後の姫路城下町建設をめどに近世城下町完成期ととらえ、これと共に個別便所の確立があるとして二段階でとらえています。最終的には、大坂城下町や堺環濠都市遺跡における慶長二〇年（一六一五）以後の徳川氏による再興によって、江戸期の姿が確立します。

個別遺構からは、便所に見られるように、早いところでは一六世紀第2四半期に近世に続く要素が見られます。また、それをさかのぼれば、一五世紀後半に一つの画期が認められます。

一方、遺物論からは、天正一〇年代（一五八二～九二）の唐津・志野焼の登場（但し、大坂城下町の調査成果では、豊臣後期＝一五九八年以降に普及すると考えられています）、一六世紀末～一七世紀第1四半期の土釜の衰退や土鍋の焙烙化、一七世紀第2四半期頃からの肥前磁器の普及などが出されています。

遺物組成を見ると、青磁から青花に移行したり焼塩壷が登場する一六世紀前半から中頃に、その初動を見る事ができます。しかし、唐津・志野焼の普及、すなわち主要な碗皿類が国産陶器類によって占められる日常雑器の近世的組成の成立が一七世紀第1四半期に見られます。さらに、国産陶器が肥前磁器に替わり、土師質土器が衰退するなどして器種組成が落ちつくのは、一七世紀第2四半期までかかります。また、瓦質土器の土師質土器化などの動きは、一五世紀後半～末から見られます。

巨視的にみれば、遺構・遺物の様相は、どちらも一五世紀後半～末からその下地が形成され、一六世紀第2四半期頃から少しずつ近世的要素が芽生え、一七世紀中頃までかかって近世への移行が完成します。

従って、一六世紀第2四半期頃から一七世紀中頃までを移行期として大きくとらえてもいいのではないかと私は考えています。そのうち、大きな変化期として、

Ⅰ期　一六世紀第2四半期頃～一六世紀後半の織田期（天正四年（一五七六））まで
Ⅱ期　一六世紀後半の織田期（天正四年（一五七六））～一六世紀末の豊臣期（天正一一年（一五八三））
Ⅲ期　一六世紀末以後の豊臣期（天正一一年（一五八三））～一七世紀初頭（一六〇〇年前後（豊臣氏後期大坂城期）
Ⅳ期　一七世紀初頭（一六〇〇年前後（豊臣氏後期大坂城期）～一七世紀第2四半期徳川初期）
Ⅴ期　一七世紀第2四半期徳川初期～一七世紀中頃

があり、五段階でとらえてはどうかと提案したいと思います。

このうちⅠ期は、まだ顕著なものはほとんどなく、胎動期と呼ぶべき段階です。Ⅱ期は、織田信長により、安土城下町が建設されます。近世を象徴する政治的遺跡の近世城郭・城下町の初現期であり、萌芽期といえます。Ⅲ期は、豊臣秀吉によって大坂城下町が建設され、京都・堺の改造が行われます。近世城郭・城下町の普及期であり、唐津・志野焼の出現、焼塩壺の普及などが見られ、成長期と呼べます。Ⅳ期は、近

世城下町の完成期であるとともに、唐津・志野焼の普及、土師質土器の衰退など前後にまたがる要素が数多く現れます。タイ・ベトナムなど国際的で多彩な輸入陶磁器の出土を見るのも、特徴的です。発展期とすることができます。Ⅴ期は、肥前磁器の出現・普及など以後の近世的要素が出そろう時期であり、完成期と呼べます。ただ、このような動きは先進的大都市のものであり、地方の中小都市や農村の動向とは一致しない可能性があります。調査・研究の遅れもあって今後の課題です。

主な参考文献

(1) 小長谷正治「有岡城大溝筋堀跡と地割」『地域研究いたみ三四』伊丹市立博物館　二〇〇五年

(2) a 川口宏海「近世在郷町における屋敷地利用の変遷―摂津国伊丹郷町を中心として―」『大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院研究集録』第一一号大手前女子学園　一九九一年

b 川口宏海「中・近世都市における便所遺構の諸様相」『関西近世考古学研究Ⅲ』関西近世考古学研究会　一九九二年

c 川口宏海「日本中世の土釜について」『考古学ジャーナル四〇九』ニューサイエンス社　一九九六年

d　川口宏海「兵庫県伊丹郷町遺跡出土の煙管について」『大手前大学社会文化学部論集』第1号　大手前大学　二〇〇一年
e　川口宏海「兵庫県伊丹郷町遺跡出土近世遺物の様相」『摂河泉とその周辺の考古学　藤井直正氏古稀記念論文集』藤井直正氏の古稀を祝う会　真陽社　二〇〇二年
f　川口宏海「一六・一七世紀における輸入陶磁器の受容と交流文化」『交流する文化の中で　平成一六年度大手前大学公開講座講義録』大手前大学人文科学部総務課　二〇〇五年
g　川口宏海・赤松和佳「関西における陶磁器・土器の様相」『海なき国々のモノとヒトの動き』内陸遺跡研究会　二〇〇五年
(3)　古泉　弘『江戸を掘る』柏書房　一九八三年他
(4)　財団法人大阪市文化財協会『難波宮址の研究　第九』一九九二年
(5)　財団法人京都市埋蔵文化財研究所『平安京左京北辺四坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第二二冊　二〇〇四年
(6)　堺市教育委員会『堺　堺市文化財調査報告第一五集』一九八三年
(7)　佐久間貴士・鈴木秀典他『よみがえる中世二　本願寺から天下一へ大坂』平凡社　一九八九年
(8)　鈴木重治「近世都市遺跡出土陶磁器の諸問題」『東洋陶磁一九』東洋陶磁学会　一九九二年

(9) 鈴木秀典「大坂城跡の豊臣前期と豊臣後期」『関西近世考古学研究Ⅰ』関西近世考古学研究会　一九九一年
(10) 續伸一郎「中世都市　堺」『中世都市研究1都市空間』新人物往来社　一九九四年
(11) 豊田裕章「煙管と近世初期風俗画―一七世紀代における京・大坂・堺の出土品を中心として―」『関西近世考古学研究Ⅲ』関西近世考古学研究会　一九九二年
(12) 土山健史「堺環濠都市遺跡における一五・一六世紀の在地土器」『中近世土器の基礎研究Ⅴ』日本中世土器研究会　一九八九年
(13) 藤本史子「中世都市伊丹の考古学研究」『ヒストリア一八八』大阪歴史学会　二〇〇四年
(14) 堀内明博『ミヤコを掘る』淡交社一九九五年
(15) a　前川　要『都市考古学の研究』柏書房一九九一年
b　前川　要「関西地方における中世から近世への便所遺構」『月刊文化財　平成四年一一』第一法規　一九九二年
(16) 松尾信裕「豊臣期大坂城下町の成立と展開」『ヒストリア二〇〇四年度大会特集号』第一九三号大阪歴史学会　二〇〇五年
(17) 森下恵介・立石堅志「大和北部における中近世土器の様相」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』

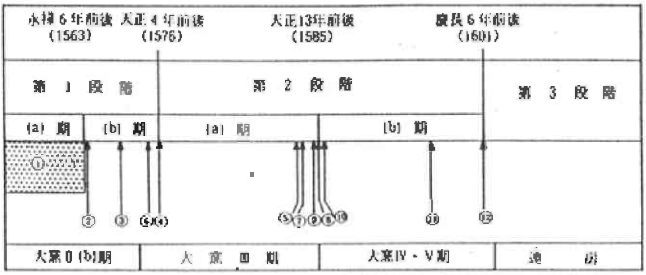
一九八六年

⑱ 森　毅「一六・一七世紀における陶磁器の様相とその流通―大坂の資料を中心に―」『ヒストリア一九九五年大会特集号』第一四九号　一九九六年

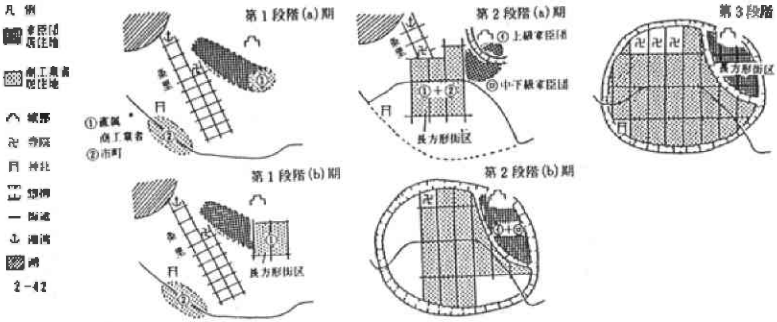
⑲ a　森村健一「八〇年代の研究成果と今後の展望一七世紀以後」『中近世土器の基礎研究Ⅵ』日本中世土器研究会　一九九〇年

b　森村健一「堺環濠都市遺跡における中近世陶磁器余録」『東洋陶磁一九』東洋陶磁学会一九九二年

⑳ 山上雅弘「竈について」『近世都市の構造』関西近世考古学研究会　一九九一年



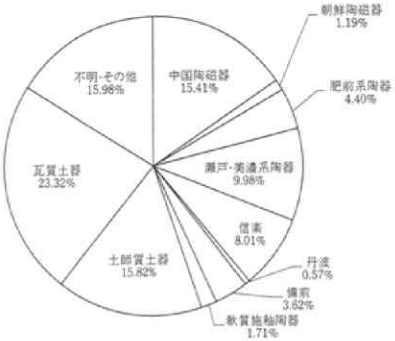
第１図　織豊系城下町編年表（参考文献 15 a より）



第２図　織豊系城下町編年模式図（参考文献 15 a より改変）

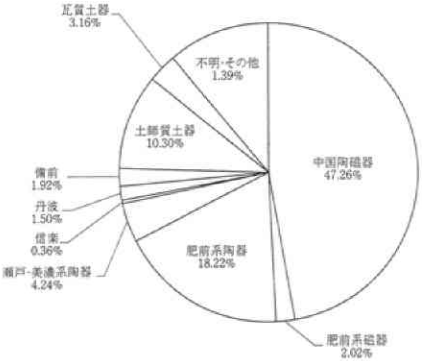
第３図　京都　安土桃山から江戸時代初期（参考文献 14 より改変）

種類・産地	破片数
中国陶磁器	298
朝鮮陶磁器	23
肥前系陶器	85
瀬戸・美濃系陶器	193
信楽	155
丹波	11
備前	70
軟質施釉陶器	33
土師質土器	306
瓦質土器	451
不明・その他	309
計	1934



土壙F 1605出土遺物産地組成

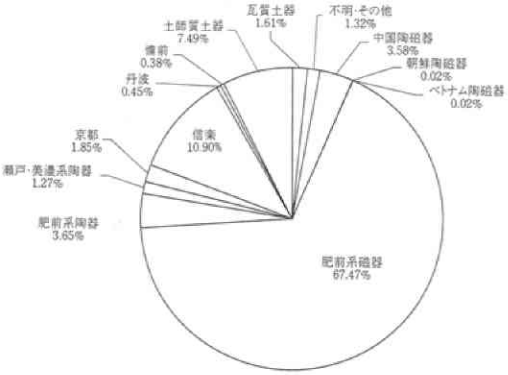
種類・産地	破片数
中国陶磁器	913
肥前系磁器	39
肥前系陶器	352
瀬戸・美濃系陶器	82
信楽	7
丹波	29
備前	37
土師質土器	199
瓦質土器	61
不明・その他	213
計	1932



穴蔵C 548B出土遺物産地組成

第４図　京都公家町の 16 世紀末～ 17 世紀初頭（上）と 17 世紀前半（下）の遺物組成－１（参考文献５より）

種類・産地	破片数
中国陶磁器	208
朝鮮陶磁器	1
ベトナム陶磁器	1
肥前系磁器	3936
肥前系陶器	213
瀬戸・美濃系陶器	74
京都	108
信楽	636
丹波	26
備前	22
土師質土器	437
瓦質土器	94
不明・その他	77
計	5834



土壙B725出土遺物産地組成

第５図　京都公家町の 17 世紀中頃の遺物組成（参考文献５より）

F区土壙F1605出土遺物

第６図　京都公家町の 16 世紀末～ 17 世紀初頭の遺物（参考文献５より）

C区穴蔵C548B出土遺物

第７図　京都公家町の 17 世紀前半の遺物（参考文献５より）

B区土壙B725出土遺物

第８図　京都公家町の 17 世紀中頃の遺物（参考文献５より）

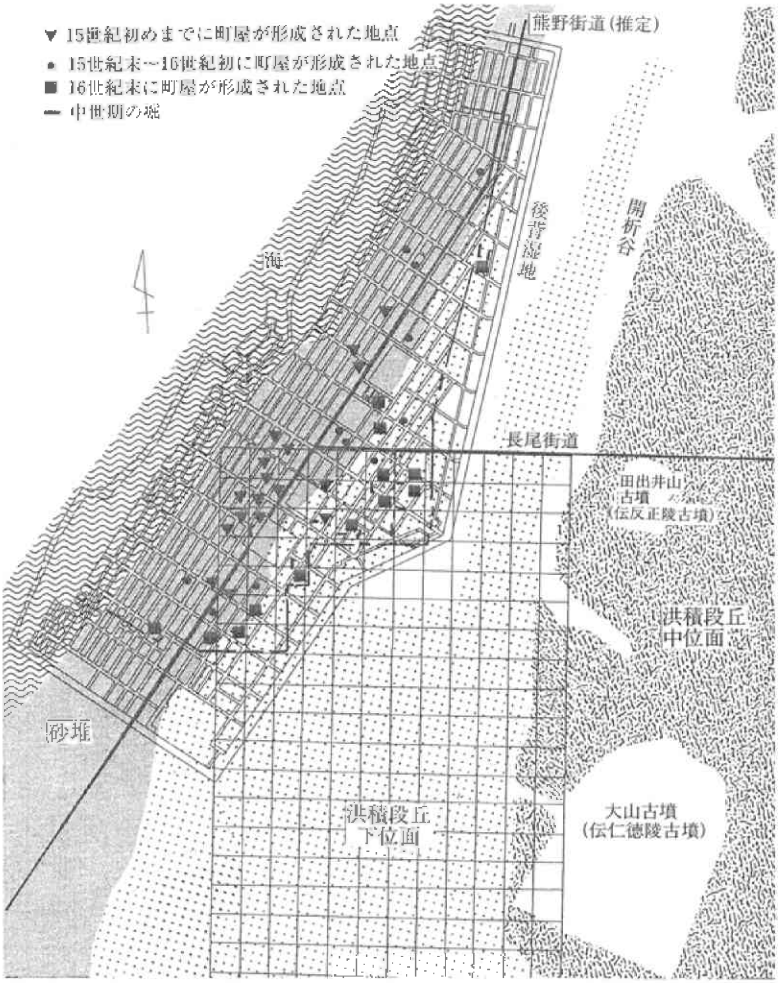
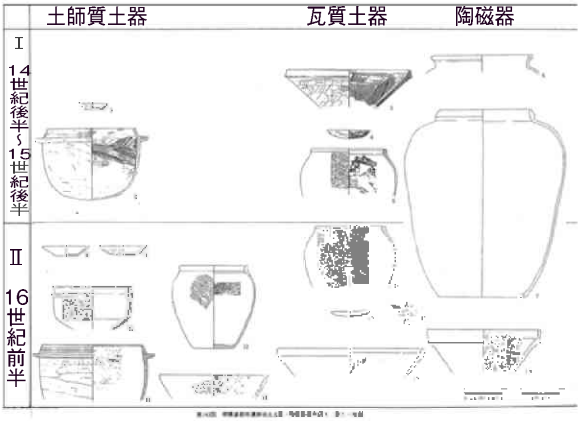
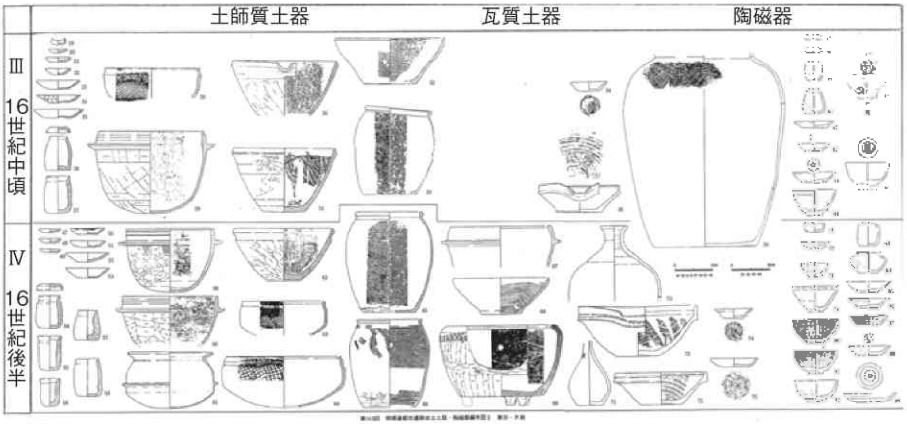


図2　堺の空間構造概念図

第９図　堺の空間構造概念図（参考文献 10 より）

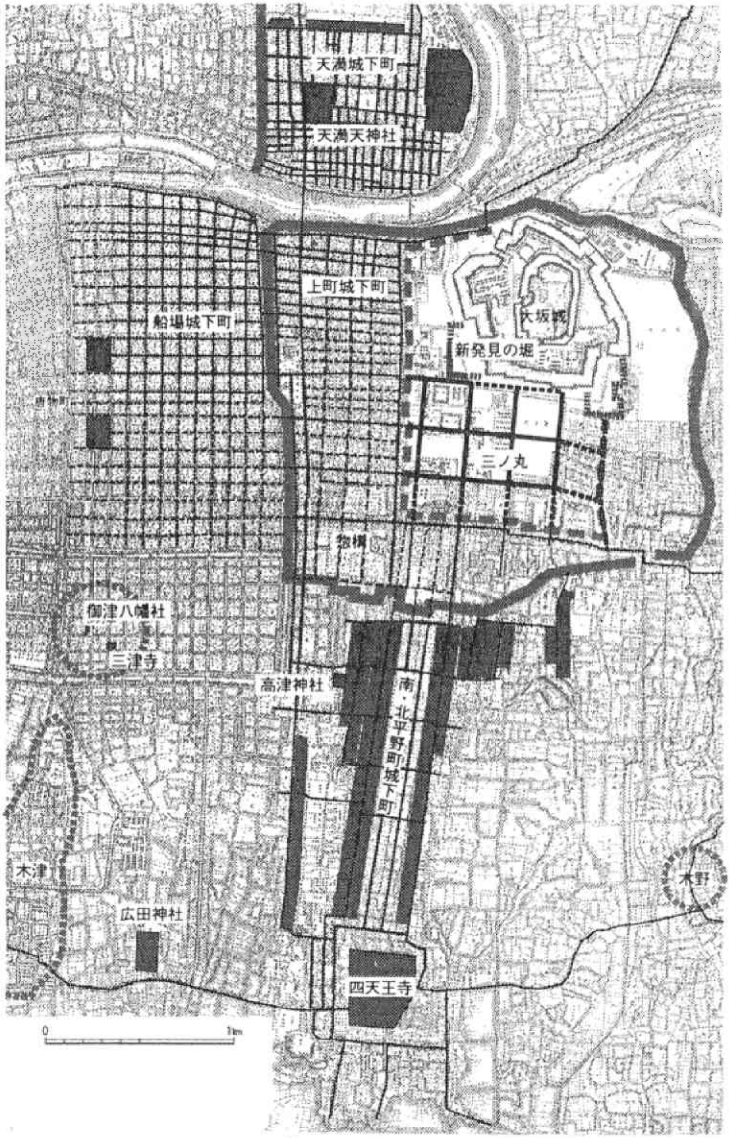


第 10 図　堺環濠都市遺跡の 14 世紀後半～ 16 世紀前半の遺物
（参考文献６より改変　S ＝ 1 ／ 20）

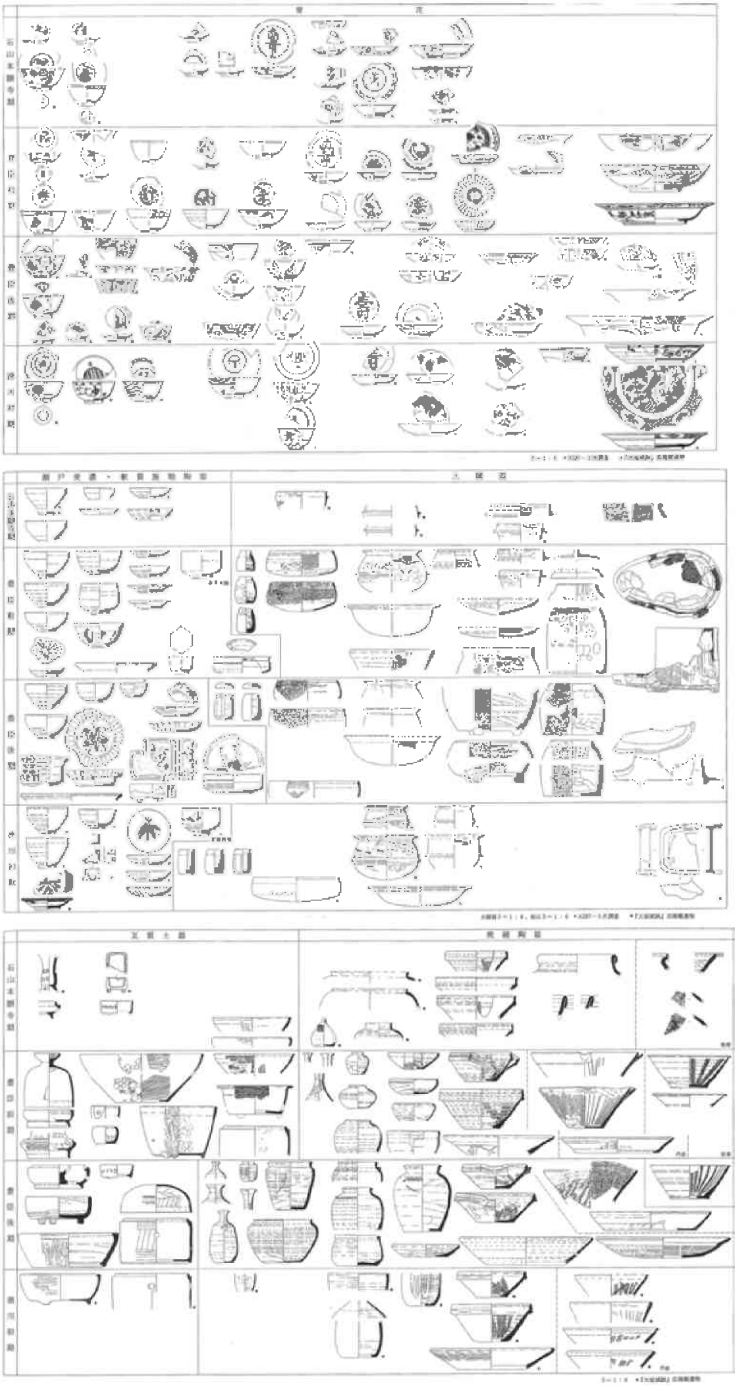


第 11 図　堺環濠都市遺跡の 16 世紀中頃～後半の遺物
（参考文献６より改変　S ＝ 1 ／ 20）

第 12 図　堺環濠都市遺跡の 17 世紀初頭～後半の遺物
（参考文献 6 より改変　S ＝ 1 ／ 20）



第 13 図　豊臣後期後半の大坂復元図（参考文献 16 より）



第 14 図　大阪城下町の 16 世紀後半～ 17 世紀前半の遺物編年表

（参考文献 4 より改変　S= 1 ／ 20）